



⑧

## 藤原るか

聴けた。

「私の願いは平和を守って、社会保障をきちんとやってくれること。そういう所を選んでくる」という。新聞の切り抜きをヘルパーに見せて「経済発展を選んだ方より十ポイントも上回って社会保障の充実を願う声が第

一位で四七％となっているのよ。安倍さんのいう改憲はたった五％なんだから、民意を無視しているね。おかしいよね」。

ちえみさんの次に訪問した咲江さんは、九十二歳。一人暮らしで、要介護1。「投票用紙が来ているはず」と車椅子を歩行器がわりにポストまで一緒に取りに行った。咲江さんは毎回、投票所で投票することが「生きていく証」という。

という。「自分も社会の一員としての一票だから、棄権なんてもったいない」と言い切る。「戦争にはお金がかかるっていうのは身に沁みて知ってる。だから介護制度もどんどん削るんでしょ？ そのくせ『全世代型社会保障』なんてことばを政策に入れたってもうダメ策に入れないよ。今の政府はダメ」とバツサリ。

## それぞれの願い「一票の話」

「こんなに『夏』に翻弄されたことは、八十五年間生きてきたけれど人生初めてね」と、十月も半ばになるというのに三十度近い気温になるとの天気予報に驚いて話すちえみさん。八十五歳、一人暮らし。

カリエスという病気のせいで歩行が困難。歩行器を使用して室内歩行がやっとで要介護2。

衆院選の投票所入場券を前に「これから友人が車で送ってくれるというので、期日前投票に行ってくる」と一日のスケジ

段は週に三千円程度の食料などの買い物があり、六十分では忙しい。訪問中は時間との闘いだ、今日はその買い物も投票所近くのスーパーで済ませるといので少し時間ができ、ちえみさんの「一票の話」をゆっくり

一位で四七％となっているのよ。安倍さんのいう改憲はたった五％なんだから、民意を無視しているね。おかしいよね」。

五年前に初めて訪問した時の歩行状態と比較すると、投票所に一人で行くのは危険なレベルになっている。投票所となっている小学校の入り口の三段の階段を這ってでも上がって、その二百メートルの体育館まで一人で行く

懸命に生きる人々のこういう声を受け止める政治に変えよう。さらに、介護を受けている方々にとってハードルの高い投票環境も改善して、と声を上げたい。  
(共に介護を学びあい・励ましあいネットワーク主宰)